

# Numéro TOKYO

NOVEMBER 2006



Mode  
カール・ラガーフェルドが撮りおろす  
華麗なるクチュールの世界

the stone collector  
魅惑のハイ・ジュエリー

Interview  
マーク・ジェイコブスが語る  
挫折と成功の軌跡

a new vision for Tokyo  
建築家、安藤忠雄が語るこれからの東京

here comes Terry Richardson in Tokyo  
テリー・リチャードソンの東京定視点観測

idea box  
東京クリエイターのアイデア・ボックス  
横尾忠則、草間彌生、小泉今日子、NIGO、nendo

0

Tokyo

## japanese stage stars thrill france

反戦映画の撮影に来たフランス人女優が  
ヒロシマで日本人建築家と出会う  
—マルグリット・デュラス原作『ヒロシマ・モナムール』の  
舞台化がいよいよ実現された。主役に起用されたのは  
日本人俳優、渡部篤郎。フランスで演じる彼が今を語る。

Photos : Ola Rindal report & coordination : Hiromi Otsuka

<<PLUIE D'ÉTÉ À HIROSHIMA>> is directed by Eric VIGNER.  
Production CDDB-Théâtre de Lorient, French National Drama Center

# 196

「東京で彼に会ったとき、彼こそが探し求めていた人だと思った。ナチュラルな魅力があり、日本人だけども日本人過ぎない顔の美しい男。とにかく会ったとたんに愛してしまうよな…彼は完璧なんだ」と、ヴィニエ氏。「ヒロシマの夏の雨」はデュラスの死後10年目にCDDB(国立ブルターニュ演劇センター)のディレクターであるエリック・ヴィニエによって2つの短編を1つの劇としてアビニオン演劇祭にエントリーされた。

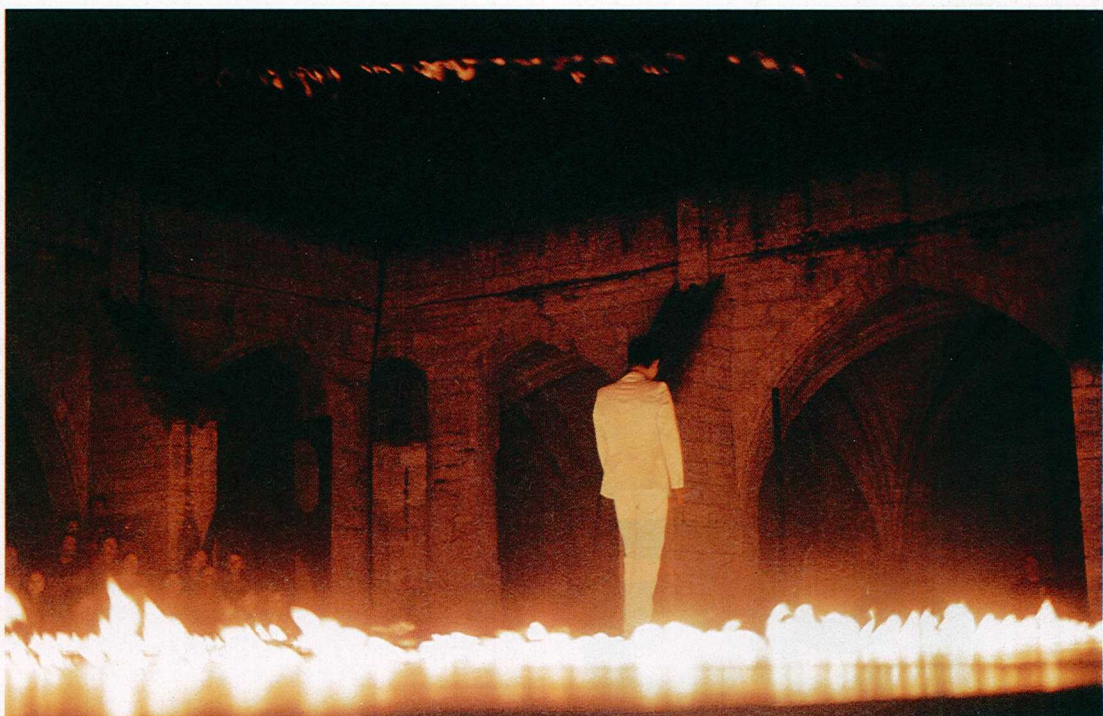
経験を積んだ監督や舞台俳優でも緊張が最高潮に達する権威ある世界の演劇祭アビニオン・フェスティバルの初日。回廊の屋上に敷いたビーチマット上でストレッチを始めた渡部の胸中にはどんな思いがよぎっているのだろうか。「2か月も練習あるし、来たら何とかなるだろうと思ったけど、え？こんなに大変なことなんだ、って」

監督に熱望されて渡仏した渡部しかし、これは渡部にとっても想像以上の厳しさだったと言っ。

「(フランスに)来てね、2日目ぐらいでがっくんと落ちたの。初めてだったね、そんな経験。何だろうって。すごい不安になった。(東京みたいに)何でもある訳じゃないし、フラットに泊まってたんだけど、変なインテリアだし(笑)。いろんなことに違和感があった。東京にいるのと同じ感覚ぐらいで来てたから…」

便利な東京とは文化も環境もまったく違うパリ。そこに単身乗り込んで2か月間みっちり、発音矯正の個人指導を受けながらフランス語と格闘し、稽古を続ける日々。

「僕は生まれも育ちも東京でしょ。その環境以外の場所に身をおいて生活したこともなくって、とにかくいろんなことに戸惑って。すごく子供に会いたくなったりとか、それまでのいろんなこと振り返っちゃったりして、俺こんなに弱かったんだって思ったの。それでも毎日稽古には行ってたけど、やっぱり調子は悪くって。京子っていう日本食材店を発見して、食材買って



きて、料理したりしてね。当初はそれがとてもいいストレス解消になったりしたね」

彼は当時の戸惑いを率直に語る。

「一度菌が取れて、3日間の休みに1泊で東京に帰ったんだけど、会う友達みんなに感動したの。すごい温かいなあって思ってた。それで、パリへ戻るときに、「あと2ヶ月あるから、一緒に行かない？」って母を誘ったんです。そうしたら母は着いた次の日入院しちゃったの。母はもともと体が弱くて以前から何度も手術を経験してるんだけど、パリに着いた途端に、それがあちこちから出てきてしまったみたいで。まあ、無事に数日で退院したんだけど、その帰りに、母が教会に行きたいって言うから、ノートルダム寺院に行ったらすごく感動したんだよね。すごくいい空気だったんです。ぽかぽかしてて。その次の日からいろんな教会を巡るようになったんですよ」

これは渡部にとって役者としてはもちろんのこと、人間としての深みをも増した経験だったのではないか。それは芝居にも反映された感がある。監督ヴィニエ氏も語る。

「彼は適応力があり、注意深く、集中力、正確さ、そして何といたっても感情の表現力の大きなキャパシティを持っている。彼のうちに秘めているエモーションを感じます」

前半の『夏の雨』のラストシーンが暗転すると、炎のレールだけで照らされた舞台を一人の白いスーツの東洋人の男が通り過ぎていく。『ヒロシマ・モナムール』のプレリユード。フランス人女優と日本人建築家の戦争によって破壊されたヒロシマでの24時間の情事。

「これは懂れといえは懂れ。すごいカッコいいシチュエーションだと思っよ。出

会った理由とかどこでどんな会話したのかもなくて、いきなり本編ではベッドシーンから始まる。何の説明もない。デュラスの本にも書いてあるけど、世の中には男と女しかいなくて出会うのは当たり前だって。その出会ってる理由は全然関係ないんだと。その人たちがこれからどう過ごすかということが大切なんだと。理由は一切書いてない。24時間の中で(相手を)引き止めて一緒にいよう、一緒にいたい、という話じゃないですか。すごく素敵なこと。そんな恋愛してみたいじゃない？」

渡部は、彼を知らないフランス人観客の前で舞台上に立つということは裸で演技しているようだと言っている。「どうなりたいたいか、お金が欲しいとか、こうなりたいたいか夢はそんなな感じです。それよりも刺激」

渡部は、職業的というより一人の人間として自分の限界をもっと見たいと感じているのかもしれない。パリで0からスタートした。フランス語を話すことも舞台を演じることも初めてだった。そしてこの旅が終わればまた新たな旅へ。気負いもなく自分に与えるハードルを上げる刺激を楽しみクリアすることを素直に喜んでる。

フランスの舞台で演じることがカッコいいと思っただから、このステージを引き受けた、と自然体で答えた渡部は、M1Mによるモダンアートの作品のような舞台へと最後の稽古に向かう。重厚な石造りの修道院跡の回廊は、灼熱の太陽に焼かれ体温と同じ温度になっている。中庭に詰め込まれたステージの中心に立ち、天と地へのスピリチュアルな折り。圧倒的な存在感。フランス人スタッフが立ち止まり、尊敬の眼差しで見つめている。この東洋人の男にはもっちゃんプレートは要らない。

<< PLUIE D'ÉTÉ À HIROSHIMA >>

フランス文学で絶大的な支持を誇る女流作家マルグリット・デュラスの原作『ヒロシマ・モナムール』の舞台化。'59年にはアラン・レネ監督によって映画化されている(邦題『二十四時間の情事』)。全編フランス語によるふたり芝居。この夏、アビニオン・フェスティバルにて公演し、渡部篤郎の演技はフランス各紙から絶賛された。●渡部篤郎(わたべ・あつろう) 1968年東京生まれ。'91年五木寛之原作ドラマ『青春の門』で俳優デビュー。代表作に'95年伊丹十三監督『静かな生活』、'96年岩井俊二監督『スワロウテイル』、'99年『ケイゾク』(TBS)、'01年神山征二郎監督『大河の一滴』、'03年『恋文』(TBS) など多数。

●公演スケジュール

'06 10/17～10/20 CAEN '06 11/18～12/22 PARIS  
'07 01/17～01/20 BREST '07 02/01～02/10 TOULOUSE

●チケット購入 [www.fnac.com/](http://www.fnac.com/)

(各劇場の窓口でも購入できると思いますが、発売開始時期が未定ですので、ネット購入が確実です)

